

出題分析		
試験時間 75分	配点 150点	大問数 3題
分量 (昨年比較) [ 減少 同程度 <b>増加</b> ]		難易度変化 (昨年比較) [ 易化 <b>同程度</b> 難化 ]
概 評 ——出題の特徴・特記事項		
<p>大問数は3題で、解答形式は記述式であり、論述・計算問題が出題された。昨年度と比較して今年度は、枝問総数はほぼ同じ、計算問題は5問増加した。また、論述問題の出題数は昨年度に引き続き増加し、総字数も65字増加した。これらを考慮すると、昨年度比較では分量が増加したといえる。また、大問ごとの難易度に差があったが、全体的な難易度としては昨年度に比較して同程度であったといえる。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	細胞内共生 分子進化 突然変異 一塩基置換 遺伝的浮動 ボトルネック効果 ハーディ・ワインベルクの法則	全体的に標準的な問題で構成されていた。標準的な問題集で演習をしっかりと行ってきた受験生であれば、完答も狙える大問であった。 (3) ② 第3塩基だけでなく、第2塩基の変異も終止コドンとなる。	標準
II	食物連鎖 生産ピラミッド エネルギー効率 摂食効率 バイオーーム 生産構造図	(2) ② 生産者のエネルギー効率は、光エネルギーに対する生産者の総生産量なので、 $470.0 \div 500000 \times 100 = 0.094 \div 0.1$ [%] (2) ③ 一次消費者のエネルギー効率は生産者の総生産量に対する同化量なので、 $(69.0 - 2.5) \div 470.0 \times 100 = 14.1$ [%] (2) ④ 二次消費者のエネルギー効率は一次消費者の同化量に対する同化量なので、 $(15.0 - 1.2) \div (69.0 - 2.5) \times 100 = 20.8$ [%] 表1を用いた場合、同化量は計算上13.7となり、エネルギー効率は、 $13.7 \div (69.0 - 2.5) \times 100 = 20.6$ [%] となる。本問ではこれも正解となる。	標準 ～ やや難

設問別講評			
Ⅲ	体循環 肺循環 体液 免疫	<p>大問Ⅰと同様に、全体的に標準的な問題で構成されていた。標準的な問題集で演習をしっかりと行ってきた受験生であれば、9割程度は獲得したい。</p> <p>(8) MHC 抗原が自己のキラーT 細胞やヘルパーT 細胞に認識されない場合、免疫機構が働かなくなる。また、MHC 抗原は個体ごとに異なるため、移植された臓器がキラーT 細胞に非自己と認識され、拒絶反応が起こる。また、PD-1 分子はキラーT 細胞上に発現し、正常細胞の PD-L1 分子と結合する。これにより自己を認識している。</p>	標準

設問構成 (設問数・形式・内容)								
大問番号	設問数 (枝問総数※)	選択式 枝問数	記述式 枝問数	語句※ <sup>1</sup> (空所補充) (一問一答)	計算	論述	描図※ <sup>2</sup>	その他 ※いずれも記載の字数以内
I	5 問 (18)	12	6	8	6	4	0	(3) ①20 字, ②30 字×2, (4) ②40 字
Ⅱ	6 問 (16)	12	4	10	4	2	0	(3) ②60 字, (5) 50 字
Ⅲ	8 問 (31)	22	9	28	0	3	0	(4) 20 字×2, (7) ③40 字

※ 「枝問総数」は各設問 (小問) に含まれる枝問も個々に数えた場合の全設問 (小問・枝問) の総数。設問形式・設問内容別の設問数も、これと同様の方法で算出した。

※<sup>1</sup> 化学式・構造式・化学反応式を含む。

※<sup>2</sup> グラフ・図を含む。

合格のための学習法
<p>例年、同志社大学の入試問題は、全体的に標準レベルの良問で構成されている。今年度はやや知識量を問われる問題であったが、例年は知識と考察のバランスがよく、受験生の学力を適切に測ることができる良問がそろっている。過去に見られたような急激な難化が今後も起こらないとも限らないが、まずは、高校生物の教科書・図説などをよく理解した上で、標準レベルの問題集をしっかりとこなしておくことよ。過去問とともに様々な大学の入試問題に触れ、知見を広めておくことよだろう。考察問題では問題文をしっかりと読み、何が問われているのかを意識するとよ。</p>